

## コラム

# 誌名の由来とコラムについて

せきぐち もとこ  
関口 素子

(メディアセンター本部課長)

本誌「MediaNet」は慶應義塾大学メディアセンターの機関誌である。主にメディアセンターのスタッフおよび慶應義塾の教職員による考察・意見などを発表するとともに、年間の活動や成果を記録としてまとめ、塾内外に広報するために毎年刊行している。一息つけるコラムも掲載しているほか、資料編にも多くのページを割いている。

メディアセンターの一員になって日の浅いスタッフから、タイトル「MediaNet」の由来を尋ねられた。聞き慣れない誌名に疑問が湧くのも当然であろう。少し説明をしておきたい。

本誌が「八角塔」として創刊された1967年当時、慶應義塾図書館の一部である八角塔は、誌名とするに相応しく図書館を象徴する姿でそびえていたに違いない。現在では八角塔に図書館の機能は残っていないが、慶應義塾のシンボルであることに変わりはない。1970年に図書館の組織として研究・教育情報センターが発足し、呼び名を情報センターとしたのを機に、本誌もKeio University Libraries & Information Centersの頭文字をとって「KULIC」（クーリックと発音）とタイトルを変えた。そして、1993年4月に計算センター（現インフォメーションテクノロジーセンター）と組織統合したことに伴い組織名がメディアネットになり、呼び名は情報センターからメディアセンターに転じ、合わせて誌名も「MediaNet」に変更した。ところが、2004年6月にメディアネット組織が廃止され、組織名がメディアセンターに改められた後も、誌名は変わることなくそのまま取り残されて現在に至っている。「MediaNet」として30年を歩んできたが、そろそろ看板を掛け替えてもよい頃かも知れない。



「八角塔」創刊号



三田にそびえる八角塔

もう一つ、毎号掲載しているコラムについても言及しておこう。ティールームは、ちょっとお茶でも飲みながら…の雰囲気とTEAcherを掛け合わせた名称で教員に、そしてスタッフルームは、読んで字のごとくメディアセンターのスタッフに書いてもらっている。どちらも図書館にまつわる話という縛りはないが、本の話が盛り込まれていたりして魅力的である。このコラムの初出はKULIC第2号（1971）のティールームまで遡るが、その書き手は意に反して職員であった。翌号からはティールームは教員、スタッフルームは職員が定着しており、図書館以外の職員がティールームを賑わせてくれたこともあった。現在は両コラムともに、学部や所属キャンパスの偏りがないように寄稿をお願いしている。